

タブノミハ ムギヲ イツピユ クイダス

—タブノキと人との交渉をめぐって—

川野和昭

1 これまでの理解と問題の所在

柳田国男は「椿の旅」で、「全體に椿といふ木の分布順序については、まだ若干の學者の考へ残しがあるやうに思ふ。太平洋岸でも氣仙唐桑以北の數ヶ所、日本海の方でも津輕の深浦、それから青森灣内の小湊その他の岬の陰に、大よそ鳥が一息に飛ぶ距離の、五倍か七倍かの間隔を以て、何れも一團の林をなして成長繁茂するのを、果たして自然界の出鱈目と見ることが出来るであらうかどうか。(中略)此木の茂る處は、大抵は神の杜である。無論椿存在の奇異が、神を祀つた原因であつたとも言ひ得るが(中略)此等を存在せしめるだけでも人間の意思であつた。(中略)この細長い日本という島は、常にチューブの如く又心太の箱の如く、威力があつて常に南方の文物を、北に向かつて押出して居たのである。椿が稲や田芋と同じ程度に、人間生活との交渉の深いものでなかつた」と述べて、照葉樹の椿が、南方から稲や田芋と同じく人間によつて持ち運ばれたもので、それが神叢となつてゐることを指摘した。

また、椿に加えてタブノキを同じ眼差しで捉えたのが折口信夫である。『古代研究』三冊に関する折口自身の解説と言われる「追ひ書き」で、民俗学篇1の口絵にタブノキの写真を挿入した経緯について、「たぶ」の寫真の多いのは、常世神の漂著地と、其將來したと考へられる神木、及び「さかき」なる名に當る植木が、一種類でないこと、古い「さか

き」は、今考へられる限りでは、「たぶ」「たび」なる、南海から移植せられた熱帯性の木である事を示さう、との企てがあつたのだ。(中略)二度の能登の旅で得た實感を、ひろうしたかったのである。(中略)海には「たぶ」、山には「つばき」、この信仰の對照を見せたかつた点もある。民俗篇第一の「たぶと椿との杜」の寫真は、さうした意味から出したのである」と述べ、柳田とほぼ同じく、タブノキは南方から人が移植したつまり人の意思によつて作られた杜の木としての理解を示している。

それでは、柳田や折口は、人の意思をどのように考へていたのであるうか。柳田は、椿に油という人の食生活との実用的な深い関わりを見ている。それはまさに、「食べる」という意思を見ていたのである。

一方、折口は柳田ほどに現実的なとらえ方をしていない。「二度の能登の旅で得た實感」と思われる「我々の祖^{オヤ}たちが、此國に渡つて來たのは、現在までも村々で行はれてゐる、ゆひの組織の強い團結力によつて、波濤を押し分けて來ることが出來たのだらうと考へられる。その漂著した海岸は、たぶの木の杜に近い處であつた。其處の渚の砂を踏みしめて先、感じたものは、青海の大きな擴りと妣の國への追慕とであつたらう。日本民族が、最初に感じたもの、あはれは、海彼岸^{カイゼン}へののすたるじあだつたのである」(「上世日本の文學・第六風土記・一地誌の成立」という記述は、それを推測させるものである。つまり、漂着した人々は居

住地の近くにたぶを植え、それは「妣の國」に対する「のすたるじあ」を感じる指標の森、木、そして場所であったという考えであろう。それはやがて、死して「妣の國」に帰った先祖たちが、折々に訪れるときの目印となったのである。つまり、折口にとって南海から「たぶ」を運んだ人の意思是、「妣の國」への「追慕」であったということであろうか。

ここでは、熱帯性のタブノキを北に運んだ「人の意思」について、「人間生活との交渉」に焦点を当てて、若干の見通しを提示してみたい。

2 南九州におけるタブノキの民俗

(1) モイヤマ（森山）のタブノキ

大隅半島のモリヤマを調査した小野重朗は、その特徴として先祖の墓地であること、聖域の侵犯及び樹木の伐採の禁止と祟りの存在等をあげている。さらに、その森がタブノキやシイ、カシなどの照葉樹で構成されていることを指摘している。事実、小野が例示している三四の事例中でタブノキは一二例を示す。中でも肝属郡田代町（現錦江町）が四例、同郡根占町・佐多町

（現南大隅町）が四

例と突出している。

構成の内容を見ると

タブノキのみが七例、

その他はイチイ、シ

イ、クス、アコウ、



島の人々が実をちぎって食べた湯泊権現のタブノキ
(鹿児島郡十島村悪石島2006.9)

「ピロウ、松、ガジュマルとの混交が見られる。また、モイヤマ以外に、タブの巨樹として曾於郡有明町の霧島神社（現志布志市）の木が知ら

れている。これらのことは、大隅半島においてタブノキが紛れもなく聖なる木であることを物語っている。そして、大隅半島やトカラ列島には、そのことと深く関わる人とタブノキとの交渉史の存在が認められるのである。

鹿児島郡三島村黒島では、山奥深く入った大きな谷の所に、タブノキの大木が立っていたもので、そこを伐るときには、黒島神社の太夫さんを頼んで山の神に伐採の許可を得て貰っていたが、その時にタブノキの大木は「神木」といって、伐つてはならないとされていた。また、現在でも中村好隆氏と日高政雄氏の屋敷には、「荒神さま」と称するタブの大木が立っている。このように黒島では、タブノキの大木を神聖視する観念が認められる。

(2) 生活用材としてのタブノキ

しかし、その一方で、タブ（赤タブと白タブ）ノキは、ヤザイ（家材）として伐り、ハツリ（削り斧）で削ったり、コビキノコで挽き割ったりして、ハシラ、ウドコ、エビキ、キヤクロなどの材料に用いていた。特に、赤タブは、黒みを帯びて色艶がよく好まれる。日高政行氏の家のキヤクロは赤タブで作られている。また、旧佐多町（現南大隅町）打詰



照葉樹の森のタブノキ
(旧肝属郡内之浦町大浦2007.4)

の鍋多清光氏宅及び、旧大根占町（現錦江町）段の段平治氏宅は、いづれも柱、キヤクロ、敷居等の主要材として赤タブが用いられている。

こうした事情を記録した資料に、鹿児島県属赤堀廉蔵が、明治十八年五月から十月にかけて実施した、十島及び口之永良部島における地租取調べの成果を報告した『鹿児島県諸島之實況全』がある。例えば、同書の口之島の頃には、「家屋ノ構造ハ凡テ松、椎、榎ノ材木ヲ用ヒ組竹ヲ以テ四壁トナス」とあり、タブノキが家屋の建材として主要な樹木であったことがわかる。また、臥蛇島の頃には「竹葉ヲ編ミテ屋宇トシテ桑、榎、「タラ」ノ木等ヲ以テ柱梁トシテ四壁ハ組竹ヲ用フ」とあり、家屋の柱や梁の材に用いられたことが記されている。

また、同書は黒島の頃には「樹木ハ概子椎、榎、榿、柞等ニシテ」、口之島の頃には「諸高山ノ半腹以上ニ樹林アリ椎、榎ノ類稍ニ繁茂スル」、臥蛇島ノ頃には「本島高岳ノ四圍ハ概子天然ノ山林ニシテ（中略）桑、「イン」榎、椿其他雜木アルモ」とあり、トカラ列島ではタブノキが樹林を構成する重要な位置を占めていたことがわかる。

さらに、十島村悪石島や種子島では、刳り舟の材として用いられていたことも明らかになっている。

こうした事実は、タブノキが聖なる森の木としてだけでなく、日常的な材木としての性格も強く認識されていたことを示している。

(3) 「タブ」の名を冠する小字名の分布

『角川地名大辞典 46 鹿児島県』によれば、鹿児島県内には「タブ」の名を冠する小字名が五二ヶ所あることがわかる（表1）。その分布を見ると、南はトカラ列島南端の宝島から、北は川内川流域まで見られる。

しかも、屋久島、種子島、大隅半島、薩摩半島と極めて連続的であることが確認できる。

さらに、その地点を地図上に落としてみると、例外的に宮之城や蒲生、始良など四、五例の山間部をのぞけば、ほとんどが海岸線に沿っていることがわかる。タブノキが熱帯性の植物で、海岸部を好んで成育することを考えれば当然のこととは言え、人々がタブノキに強い眼差しを注いでいたことは容易に理解できる。特に、谷合いの地形を意味する「追」の名を伴う例が一四例、その他に「川」を伴う例が三例、「渡」が一例見られるのは、すべて「水」と関わっている場所であることは注目すべきことである。つまり、海岸線と水とが「タブノキ」と深く関わって認識されていたといつてよい。

これとは別に、鹿児島湾奥の始良郡始良町木津志の「榎木山神」という地名は、タブノキと山の神が結びついているのが注目される。現在、木津志集落ではその小字に「山神」の存在は認識されていないが、タブノキが「山神」の神性と関わって認識されていたことは推察できよう。

さらに、宮崎県を見てみると、南は串間市から日南市、宮崎市、新富町と海岸線を北上し、西都市まで一ヶ所分布する（表2）。ここでも「追」の名を伴う例が宮崎市の花ヶ島に一例見られる。また、新富町新田には「榎神」の小字名が見られ、タブノキそのものが神性を帯びるものとして認識されていることを示している。

また、熊本県に目を転じると、天草島に三例、球磨川沿いの球磨村神瀬に三例を認めることができる（表3）。何れも、海岸線と河口から二〇kmほど入込んだ球磨川沿いであり、鹿児島同様に海岸線と水とが「タブ」と深く関わって認識されていたことがわかる。ただ、神瀬の例は表

(表1) 鹿児島県内の「榊」に関する小字名一覧

番号	市町村名(旧名)	大字名	小字名
1	十島村	宝島	榊田
2	上屋久町	宮野浦	榊木
3	中種子町	坂井	榊毛
4	西之表市	西之表	榊木小田
5	佐多町	辺塚	榊ヶ迫
6	根占町	辺田	榊木平
7	有明町	野井倉	榊木
		蓬原	榊木
8	福山町	福地	榊木平
9	始良町	木津志	榊木山神、榊木野
		西餅田	上榊木、下榊木、榊木の下
10	開聞町	十町	榊木平、榊木平下
11	顛娃町	郡	タブノ木、榊川、榊木川前、榊木川後
		御領	榊木ヶ平
		別府	二本榊
		上別府	東高榊、西高榊、榊木迫、榊木迫東
12	枕崎市	東鹿籠	二本榊、二本榊西
13	大浦町	大浦	榊木下、榊木原、榊木原迫、榊木山、小榊木迫
14	加世田市	内山田	小榊山、榊木迫、下榊木迫、上榊木迫
		津貫	榊木山
		宮原	榊ノ下
15	金峰町	大坂	大榊、榊ヶ平
16	吹上町	永吉	榊木ヶ原
		和田	榊木ヶ迫
17	東市来町	湯田	四本榊(榊の誤記)
18	市来町	大里	榊木ヶ迫、榊木ヶ迫頭、榊木ヶ迫頭平
19	川内市	寄田	榊木渡
20	輝北町	市成	榊木迫
21	蒲生町	上久徳	榊木
		漆	榊嶺野
22	宮之城町	舟木	榊木ヶ迫
23	祁答院町	蘭牟田	榊ヶ丸

『角川日本地名大辞典46鹿児島県』角川書店昭和58年により作成

(表2) 宮崎県内の「榊」に関する小字名一覧

番号	市町村名(旧名)	大字名	小字名
1	串間市	市木	櫛木
2	日南市	平野	櫛木
		東弁分乙	櫛之木ヶ平
		塚田甲	櫛木尻
3	宮崎市	花ヶ島	榊ノ木
		細江	榊木
4	新富町	新田	榊神
5	高岡町	内山	タブノ木
6	西都市	三宅	榊木ノ上、榊木ノ下
7	山之口町	山之口	榊ヶ尾

『角川日本地名大辞典45宮崎県』角川書店昭和61年により作成

(表3) 熊本県内の「榊」に関する小字名一覧

番号	市町村名(旧名)	大字名	小字名
1	天草町	高浜	たぶの木
2	本渡市	下浦町	タブノ木
3	五和町	鬼池	タブノ木迫
4	球磨村	神瀬	多武除、甲尾多武、乙尾多武

『角川日本地名大辞典43熊本県』角川書店昭和62年により作成

記が「多武」の字になっており、「楯」を表しているのかは今のところ確認できていない。

一方、奄美、沖縄には、「タブ」の名を冠する小字名は全く分布しない。これは、何を意味するのであろうか。この両地域の人々にとってタブノキは関心の外にあったということであらうか。

(4) タブノミの食習俗

①タブノミハ ムギヲ イツピユ クイダス（タブの実は、麦を一俵食い残す）

大隅半島の東海岸、肝属郡佐多町（現南大隅町）打詰

タブノミは、梅雨に入るところに真っ黒になって熟れる。それは、普通作の田植えのころに当たっている。稲の早期栽培を始める昭和三二年頃まで、普通作の田植えが始まると、ニセ（ニ才・若者）の衆に命じて、タブノミを穫ってこさせるものであった。ニセたちはカリテゴ（背負い籠）を担いで穫りに行くものであった。

ニセたちが穫ってきたタブノミは、水に浸けて、浮いてきた実は虫食いなので取り除いて、熱湯をかけて、塩をまぶして食べる。少し臭いがするが美味しく、腹が膨れる。炊くと苦くなって美味しくないという。タブノミには、粘り気のあるモツタツ（糯タブ）と、あっさりした味のもの、実の小さいものと大きい



打詰で一番おいしいというタブノミ
（旧肝属郡佐多町打詰 鍋多清光氏宅 2007.4）

ものがあり、モツタツで実の小さいものが美味しい。

「タブノミハ ムギヲ イツピユ クイダス」と言い、麦一俵分を節約できると語る。

打詰の隣集落である同町辺塚、同郡肝付町大浦でも、同じ調理方法によってタブの実を食べていた。

②土用タブ

西之表市安納

土用タブと言って、土用のころに熟れる。木の葉先になっているので、末先まで上つていき、枝を引き寄せてちぎって食べながら後退りしながら下りて、また上つてと繰り返しながら食べた。

水に浸けたりして食べたことはない。（昭和二五年生まれの人が小学生のころ）

③土用タブ

西之表市元和（庄司浦）

海岸線に生えていて、土用のころに熟れるので、ちぎって食べる。

④土用タブ

南種子町荃永

新暦の六月下旬から七月上旬に黒く熟れる。梅雨のころで麦刈りなんか畑に行くと、畑の周りに木が生えているのでちぎって食べるものであった。直接食べるもので水に浸けたりはしなかった。（昭和一五年生まれの人が中学生から高校生のころまで）

⑤コウジ ガ ネル（麴が吹く）

鹿児島郡十島村の悪石島

昭和三〇年代までトビウオ漁の時代に、タブノミをちぎってご飯代わ

りに食べた。タブノキは、家の周りに防風林としても植えてあった。道路改修などで切り倒してしまい、今では神社や神様のいる場所にしか残っていない。山に立っていたタブノキは、丸木舟の底を広げるためのセイレ（船底の構造板）に用いた。

青年たちは、家の周りや、湯泊、東の谷まで出かけ、腰にチュウハンテゴ（小さな腰籠）を付けてタブノキに登り、タブノミをちぎるものであった。午前中に四く五升ぐらいちぎり、午後と同じくぐらいちぎるものであった。一家族で一シーズンに七日ぐらいちぎって食べたという。

「コウジ（麴） ガ ネル（吹く）」といつて、タブノミの表面全体に白い粉が吹いてくる。この状態になったタブノミは木の上でちぎってそのまま食べるものであった。

また、「コウジ ガ ネツ」ていないものは、苦くて直接食べることはできないので、樽に水を張り一晚、あるいは朝から夕方まで浸けたりして食べた。こうして水に浸けたタブノミは、食べると舌にジーツと刺すように甘みが出て、美味しくていくらでも食べられるもので、両手で掻き込むようにして食べるものであった。

さらに、熱湯をさっとかけると、黒いタブノミが紫色に変わって、粘りが出てモチモチして、甘みが出て美味しい。しかし、黒いタブノミは炊くと苦みが出て美味しくないと。タブにも美味しいものと美味しくないものがあり、葉っぱの小さいものより大きいものの方が美味しいという。

タブは、一年おきに実を付けるもので、タブノミの成る年にはトビウオがよつてこないともいう。

また、平島でもタブの実を食べていた。平島では、奥山というところ

にタブノキがたくさん生えていて、小さな籠を腰に付けて、木に登ってちぎるもので、湯をさっとかけて食べるものであった。モチモチしてとても美味しいものであったという。

⑥ 鹿児島郡十島村宝島

さらに、トカラ列島の南端の宝島では、現在でも木に登ってちぎって食べていて、十島丸のお客さんにも振る舞っている。宝島のタブノミは粒が小さくて、とても美味しいという。

⑦ シラコ ヲ ファイテイル（白い粉を吹いている）

鹿児島郡三島村黒島

土木工事などの日雇いで現金収入を得るようになり、内地から米を購入するようになる、昭和三〇年代後半ごろまでは、タブノミをちぎってご飯として食べていた。六月のころに、腰に小さなチュウハンイデク（昼飯入れ籠）を付けて高いタブノキに登りタブノミをちぎった。チュウハンイデクがいっぱいになったら木から下りて、一斗ぐらい入るムツトイイデク（麦穫り入れ籠）に移し、ムツトイイデクが満杯になったら家に担いで帰った。一シーズンで七く八回取りに行つて食べた。昭和一〇年頃に、一斉に竹に花が咲き、実がなり枯れてしまった。その時鼠が大量に湧いて、食べ物をおいづぶして人に噛みつくほどになり、飢饉の状態になった。そのころは、それまで以上にタブノミを食べた。

タブノミは、外側が熟れて表面が黒くなり、やがて「シラコ ヲ ファイテイル（白い粉を吹いている）」状態になる。このころになると一番美味しくなり、そのまま食べることができた。黒く熟れた状態のタブノミは、すぐに食べる時はお湯をかけて食べるが、そうでないときは一晩水に浸けておいて食べる。そうすると苦みがとれて美味しくなる。二

皿ぐらゐの厚さの部分を食べ、種はべろつと吐き出す。マルジョウケ（円い筈）にタブノミを入れて、その周りを家族で取り囲んで食べるものであった。つまり、今石みぎわが「つばき・おがたま・たぶ―黒山島探訪ノート」（『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第五号 二〇〇六、三、一五）で示した、種子を搗いて粉にして食べる、『八丈実記』の「またみ」の食べ方とは異なるのである。

(5) タブノミの遊び

西之表市浦田

タブノミを食べることはしないが、麦藁の桿の先を割って広げて、そこにタブノミを入れて吹き上げると、くるくる回って浮き上がる。その高さを競って遊んでいた。昔は巨木があつたが、皆丸木舟の材料に伐り倒してしまつて、現在はなくなつた。

3 まとめとしての若干の見通し

以上、述べてきたように、若干の事例とは言え、タブノキが神聖さを持った樹木であること、しかし、一方で建築材、舟材として有用な木材であること、「タブ」の名を冠する小字名の存在によって人々が深い関心を払っていたこと、さらに、タブノミは、穀物と同等の価値を持った重要な食物であつたことが理解できた。

それにしても、食物としてのタブノミの存在は驚きに値する。鹿児島郡十島村悪石島や、三島村黒島の一シーズンに一家族で一石近く食べる例や、大隅半島東海岸の南大隅町（旧佐多町）打詰の「タブノミハム

ギヲ イツピユ クイダス」という例を見れば、単に補給食というレベルのものではなく、食体系の中に明確に位置づけられていることを理解せざるを得ない。

柳田が疑問に思つた樺の不連続の連続ともいえる成育、しかも東北地方という高緯度・寒冷地での成育は、柳田や折口も言うように「人間の意思」であることは明らかである。しかも、それは「食」という視点で見えていくときに初めて見えてくるように思える。つまり、タブノキにしても人が食物として持ちながら移動したという可能性が出てくる。

しかし、その時に奄美や、沖縄諸島に「タブ」の名を冠する小字名が分布せず、鹿児島を超えると極端に減少するということは、どういうことを意味しているのであろうか。この両地域におけるタブノミの食習俗に付いての資料の聞き書きを重ねなければ判断できないが、それが空白であるとすれば、柳田や折口が想定する、黒潮に乗って日本列島にやってきた人々の古里はどこであつたとするのか、大きな問題にぶつかることになる。「海上の道」の再考に繋がる問題である。

野本寛一が試みる、人と木の食や植物の球根の食を列島の民俗文化全体の中に位置づけようとする試みや、川野の竹と人との関わりをアジアという広がりの中で焼畑文化として捉えようとする試みなどは、そういうことへの挑戦的な試みであろう。さらに言えば、佐藤洋一郎の『クスノキと日本人』の研究成果など、農学、植物学などとの連携を視野に入れた取り組みが、柳田や折口を発展的に継承し、列島の文化史の研究に繋がっていくと思われる。その意味でも、未だにフィールドは民俗学の源泉であると言えよう。決して、伝承の場は都会に移っているのではなく、野にあることは間違いないし、そこからの立ち上げでない限

り、力に満ちた役に立つ民俗学に成りようがないことは明確である。

最後に、日本の枠を越えてタブの民俗を捉えようとして、韓国の多島海にまで踏み出し精力的に取り組んでいる、東北芸術工科大学の今石みぎわの「飛鳥、タブと信仰の道をたどる」(『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第四号 二〇〇五、三、一〇)や、先に挙げた「つばき・おがたま・たぶ―黒山島探訪ノート―」は、極めて魅力的な成果である。北のタブ、南のタブについて、明らかにしなければならぬことはまだまだ多いのである。さらにいえば、柳田や折口の残した課題はまだまだ多いということである。

註

本文は平成十八年十月十五日、山形大学で開催された日本民俗学会年会において、同題名で口頭発表したものを文章化したものである。

(本館学芸課長)